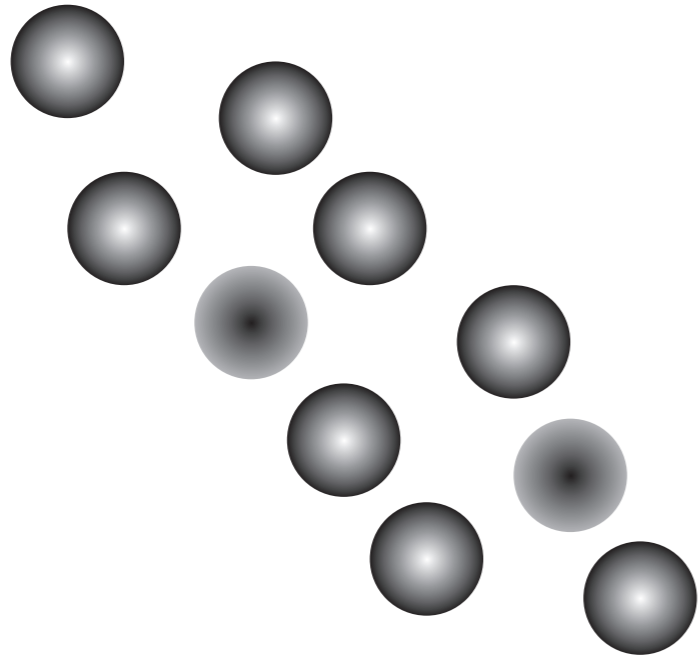

月 刊

MéLange

Vol. 129



2018.01.28

詩と評論

月刊「MéLange」

Vol.129 2018.01.28

「月刊メランジェ」編集部

詩・俳句

いち月 (俳句と詩) ……安西佐有理 03
 電線 ……中嶋康雄 08
 この世の雪 ……福田知子 09
 独秋詠 (俳句) ……岩脇リーベル豊美 09
 亡霊の言葉) ……野口裕 10
 こすれて ……大橋愛由等 11
 孤島にて ……高木敏克 12
 天地さかさまの謎 (続) ……富岡和秀 13
 盲目 (あるいは感じる肌理に) / 赤い花と木 ……高谷和幸 14
 海の声 ……北岡武司 15

2018 奄美文学紀行

母「青幻記」と父「太陽と鎖」のあいだのエラブ〈一色次郎論〉 ……高木敏克 04
 即興詩〈1月17日奄美市名瀬にて発表〉 ……大橋愛由等/北岡武司/高木敏克 07

連載/エッセイ

神戸詞あしび118「同行三人の団塊ツアー 語り合いは深く続いた」 ……大橋愛由等 16

編集部日より★48/2018年がスタートした。今年も例年のごとく、奄美ふゆ旅をこなして帰神してきた。1996年から一回も欠かすことなく、奄美群島に通い続けていると、島で会うひとびとの構成が違ってきているのに気づく。1月17日(水)。ウタシャの西和美さんの店にお邪魔したら、去年逝去した築地俊造さんについて、坪山豊さんも休養中であることが判明。一方で中孝介は歌手ばかりではなく、台湾で俳優業もこなし人気も上々。元ちとせは古仁屋に住んでいるなど明るい話題もある一方、ウタシャとして第一線で活躍している若手は、前山慎吾ひとりという現状。「最近、若い人はシマウタに関心がないのかもねえ」と和美さんが云う言葉をさびしく受け止めた。1月18日(木)。奄美を旅立つその日、詩人の仲川文子さんと歓談。去年の奄美は藤井令一氏という奄美=シマを表現してきた詩人が亡くなってしまったことによって、隆盛を極めた奄美の詩の世界が様変わりしてしまった。つまり詩人がすくなくなってしまうのである。いずれ新たな詩人たちが登場するのに違いないが、奄美を表現しつづけてきたその文学的鋭意をなんとか評論の形で私なりに遺しておきたいものである。(大橋記)

◆ いち月

安西佐有理

献春の吐息に雨は凍えゆく

注連縄の稲穂に雀来ぬ住処

白菊と若松わらう薄明かり

むかひのいえのいぬがほえて
 いるのが、かいだんのと
 ちゅうでみえた。すがたの
 ないなきごえだけがきこえ
 ているあいだは、みがまえて
 かいだんをのぼっていた。
 やつと、ああまだいきてい
 るんだとおもう。てればは
 とけいのかわりになるよう
 で、いきりずむにはなら
 ない。いぬは、とけいのか
 わりになるかもしれない。

母「青幻記」と 父「太陽と鎖」のあいだのエラブ

高木敏克

一色次郎の「青幻記」情景は実に生き生きとして美しい。主人公の「稔」が母の「さわ」とともに生まれ故郷の沖永良部島に戻ったのは、母が三十二歳、稔が小学校五年生の時であった。自然が限りなく大きく、人間が限りなく小さく感じられる。自然の風景は極めて端正で清潔に見えるのに対して小さな人間存在は不安げで不定形に見える。鳥も魚も植物も神が直接作ったように見えるのに、人間は、泥からできてカオスを残している。

この島では海を見ていると一瞬海の限らない恐怖に支配されているように感じる。怒涛となつて打ち寄せる恐怖に打ち勝つには海に打つて出るしかないように思える。勇気があるからではなく恐怖のために海に出る。そして孤島にたどり着くとその恐怖はさらに深まり、青すぎる宇宙の闇に一人浮かんでいる面持ちになる。

——強風はこやみもなく吹き、海浜の風景は、ただ、広く明るいばかりである。その空虚な雰囲気には、まるで、そこに人間が立っていることを許さないような、きびしいものさえ感じられた。そんな、おそらくいままでの清潔な感じがみなぎっていた。(「青幻記」)

この恐怖を引きずらざるをえないのは、人間には不幸の自覚があるか

——「鹿児島の人間は、鬼より恐ろしいもんじゃったぞ。それでなあ、それでなあ、毎年砂糖役人が来ると、島の者は機嫌取りにな、島一番の娘を差し出したものじゃ。丑松ばあさん(曾祖母)が、その人身御供に上げられて、そうして生まれたのが公平(祖父)じゃ……」……どことなく異なるものを感じて違和感を抱いたのも、その家系にほかの血が混じっているからだ。(太陽と鎖 p.91)

その血は邪悪なおいがするものかもしれない。その祖父というのは妻のほかにも女を持っていて分家を作っているのだから。

——島々に若い娘の人身御供を要求する鹿児島役人、それを黙認する島役人。その島役人が和泊警察に変わっても、島民を虫けら同様に扱う気風はそのまま伝わったのだ。その和泊警察署が、青年代を支持しないで八合側についた。これでは勝目が出るはずがない。(同 p.92)

祖父の子であり稔の父である元はその邪悪な血に襲われることになる。大正五年六月十三日に沖永良部島の余多村で起きた八合事件で島の青年団と暴力団が「謎の衝突」に巻き込まれた。元は冤罪で服役した刑務所で結核を悪化させ、かろうじて入院できたものの手遅れで、獄中死同然の病死をした。「謎の衝突」といえるのは島の警察も鹿児島島の裁判所も現場検証も証拠品もないまま、暴力団を恐れて暴力団の被害届を受けて、暴力団を一人も逮捕することなく、早計な裁判がなされて、青年団員九人が投獄された。懲役三年が四人、懲役二年が五人で稔の父親も青年団の安易な口裏合わせの契約で真実は闇に隠れたままになっていた。四十七年間もの間。

——誰にも言わんと、約束したんだぞ。八合次郎は、みんなでやったことにしようと、余多村の青年団が契約したんだぞ。

こういうのは、半世紀の間まだ怯え続けながら八合次郎を白ノミで突き刺した実行犯の老人竹春村。事件後、藪原と改名して財をなしている。

らだろう。この不幸の自覚の一つは父が結婚以前に結核を病んでおり母も感染していること。そして稔は母から隔離されなければならない運命を背負っていることであろう。

しかし、この時、母は後悔していたのである。母は結核にかかっている、なにより恐れていたのは息子の稔に感染させるということであり、鹿児島港から島に連れてこないことを決心していたのである。

それは、母からの直接の言葉としてではなく、母の死後にユタ(占い師)が、死について理解しえない稔に事実を説明するために、母の霊を呼び起こして語られたものであった。

——稔さん、許してください。お母さんは、あなたの島に連れてきてはいけなかったのです。あなたは、島では暮らしていけない方です。それがわかっていながら、お顔を見ると少しでも一緒に居たくなくて、お母さん、僕も一緒に連れていってください、とあなたがいつてくださったとき、お母さんは、うっかりうなずいてしまった。(「青幻記 p.25」)

ようやく、母の死を理解できた稔は母の魂が戻ってきたザクロの木の幹をつかみながら「おかああさーん」と叫んだ。「稔さーん」と母の声が返ってきた。

——「ゆるしてくださいあーい！でも、稔さん、お母さんは楽しかった。あなたと島で暮らした六か月は、決して長いとは言えないものでした。でも、誰にも邪魔されず、ふたり水入らずで暮らすことができた。この六か月がなかったら、お母さんの人生は、あんまり、みじめです」

さらに、沖永良部島の恐怖は、島ごと逃げ出したくなるような内地からの厳しい搾取の対象になっていたことである。稔の漠然とした海辺の不安は、さらに深い過去からの不安な支配の海に浮かんでいる。青い闇の海流に浮かぶこの島の恐怖はとめどなく打ち寄せてくる怒涛となる。

——「八合を探しに行くときには青年団の団長は、八合を見つけても手出しをしてはならんと言いましたね」「それから、刃物も持つてはいけないという命令も出しましたね」「貝と藪原の二人は、この命令に背いたわけですね」(同 p.93)

貝は水の中に隠れてしゃがんでいる八合に向かって人の頭ほどある石を「……投げたのが当たって、八合は水に浮かんでしまった」竹春村という男は「白ノミでな。白を削るときの白ノミでな、柄の長さが四尺もあるんじゃ。そんなもので三人が代わる代わる叩いたで、八合はすぐにぐったりしてしま」(同 p.94)

人間がそこまで残酷になれるものなのか、考えても解らない。ただ、人間を狂気に走らせるものは恐怖以外にはないのではないか。傷ついた生き物は恐怖を感じつつ自らも相手に恐怖を与える。崩れた顔や身体は恐怖の対象になり、化け物に見え、恐怖にかられた相手はそれが消えるまで、つまりは死ぬまで攻撃をやめない。それが殺人だ。だから、人を殺めないためには勇気が必要だと思ふ。壊れた自分を恐怖して自殺しないためにも。暴力団の八合次郎にも自分自身を忘れるほどの恐怖があったのかも知れない。

町の暴力団にしろ、村の暴力団にしろ、国家権力としての警察にしろ、彼ら突き動かしているのは恐怖だと思える。警察が恐怖のあまりに暴力団の味方をするにはあるのかもしれない。だが、すべてが恐怖に支配されているとしたら、この島は暗黒の海である。この暗黒は青年団にまで浸透し醜悪なリンチにまで発展してしまつた。最悪の死刑執行人は竹春村だといえよう。この男は瀕死の八合次郎の頬を白ノミで削ぎ落していたのだから。

残念ながら八合事件に対する警察と裁判所の対応は臆病で怠慢で愚かというしかない。真犯人の竹春村は藪村という苗字に改名し、刑務所に入ることなく無実の前科者を身代わりにして島では豪邸と思える屋敷で気楽に酒を飲みながら長生きしたが、律義に青年団の約束を守った父親の元は「私がやりました」と前に出た。それからみんな出た「致命傷になつた、石で頭を割つた貝と、白ノミで八合を削つた竹の二人は刑務所に行かずすんだ。その時、藪原と改名する前の竹だけが残つた。あたかもその罪から逃れられるかの如く「竹」から改名した「藪原」だけがその後優

雅な生活を送った。大山がこのことを暴いてから七十四日に藪原は死んだ。その間の半世紀警察と裁判所のシステムは情眼をむさぼっている。母親の美しい幻を求める小説「青幻記」のもう一方には父親の暗黒の無念を追い求める「太陽と鎖」の小説がある。そして、「太陽と鎖」のあとがきは次のように終わっている。

——なお、島にはこの本は一冊も送られません。実話と小説のけじめのつかない人が、一人でもいたら困ります。

この確執は一体何だろうかと思う。一色次郎は沖永良部の何かに絶望しているのだろうか。最後の一人のために沖永良部が許せないのだろうかと思う。文学としての悲劇は悲劇のまま閉じなければならぬのだろうか。そして、現実の悲劇としては、父が死に、母が死に、その原因となった最後の一人も死んでいる。死んでも償えない罪なのかもしれない。この現実文学でも救いようのない悲劇としか言えない。

——「お父さんの話をしてあげましょうか」

「お人よしたったんだろ。子供のころ、教室にふたりいるとき、友だちが掛図を破ったのを、自分のせいにして、立たされたんだろ。ばかだよ」

「お父さんのことを、そんな風についてはいけません」母の語尾が震えていました。

この語尾の震えには、もつと重大な、運命的な、生死をさまよう別別の意味があった。

前述の八合事件の取り調べの時、警察の取り調べの際に、「私がやりました」と前に出た。「みんなでやりました」という青年団の約束を守るために最初の口火を切ったのであった。

母の願いは息子の「のぼり口説き」という大和のぼりの謡にあらわされ

た。敬老会の崖の上の月夜の丘で、母は無理を押しつけて最後の舞を舞ったのであった。

——「それでは踊らせていただきますが、もともとつたないうえに、このような体でございませうから、五体に若い自分のハリはございませうが、おどりのまねごとなりと出来ましたならばどうぞおゆるしくください」（青幻記P164）

そして別れの時はくる。二学期もおわりに近い晴れた日の午後、母と私は、サンゴ礁の潮干当で魚を取っていた。

——「お母さんは、なんだか胸がぐるしくなりました。それから、手足がしびれて動けなくなりました。たいしたことではないように思うんですけど、歩けません。それで稔さんにお願ひというのは、ホレ、うしろを見てください。崖に割れ目がありますね。あそこがのぼり口になっていると思います。稔さんは、あそこへ、いっしょうけんめい、いそいでほしいの。そして誰か、呼んでください」

「稔さん、お母さんって呼んでください。さつきから、まだ、一度しかいってこないじゃないの」

「お母さん！」

「稔さん、もう一度」

「お母さん！」

「向こうに行き着くまで、どんなことがあっても、うしろを見てはいけませんよ。約束してくれませうね」

——私が母に気づいた瞬間、母が、何故目をそらせたか。その謎は、それから長い間私を苦しめた。理解できるまで、三十六年かかった。じつさに、その場所に自分が立ってみるまで。

◆レモン畑

高木敏克

彼女は黄色い光の中にいた。
出てきた小屋の辺りは逆光になっていたが、僕に気づいて影の中から出てきた彼女は本当に幸せそうな笑顔に充ちていた。

少し近づきかけたが、振り向いて
楽しげな仲間に僕が来たことを告げながら、僕が誰なのかを説明しているように見えた。

きつと彼女の仲間たちは既に彼女
から僕のことを聞いているらしく、
笑顔で彼女を僕のほうにせきたてて
いた。

何よりも彼女がここの生活が気に入
り、生活を楽しんでいることに僕は
満足した。

小さな林の小径を抜けるとレモン
畑が見えた。今は収穫の時なのか、農
作業の若者たちに照れくさそうに背
を向けて彼女は僕に近づいてきて、

「かわつてないね」と云った。

「うん何もかわつてないね」と僕も
云った。

◆ただずみ

大橋愛由等

風の語り返しが
ふと 背をなで
島のとりたちに
気づきをもたらし
海の青に

ささやかな
音群れが
ひびくなら
キビ畑にただずむ
憶いのいくつかと
ひとびとの
笑みの奥底に
じつと ずつと
控えている

ひとりごちの
あの場面 かの場面に
太鼓のひとふりが
似合うなら

クチは
まぶいの
ありかを
捜しつづけるのに
ちがいない

◆えらぶゆり

北岡武司

では お盆にね
お爺ちゃん お婆あちゃん
お父ちゃん お母ちゃん
戦でなくなつたおじさんたち
一緒に正月をすごせて
みんな幸せでした

ごちそうもつて
お墓に行きましょう
別れの宴を開きましょう
次はお盆ですね
せりあがった海が
丘を見おろしています

ふくらんだ雲が流れます
別れの杯で
黒糖焼酎を飲みましょう
頭上は真つ青
今度会うまでに
この青空の下

えらぶゆりが
白く咲き誇るでしょう
雲よりも白く

これらの詩は1月15日から18日の4日間〈奄美ふゆ旅〉に旅立った3人が17日に奄美市名瀬で発表した即興詩です。

◆電線

中嶋 康雄

踏切
遮断機がおりる
がらがらに空いた電車が走る
カラスが罅猛な鳴き声を放っている
店舗は次々と廃業し
腹を空かせた影が
日に焼けたメニューを見ている
冷たい火が走るようになり
なにもかもが黒ずんでいる
水溜まりが凍り始めている
ろくでもないものがらんだうのまま
ろくでもないことを喚きながら

涎を垂らしている
錆びついている横丁の
由来を知るものはもう少ない
夕方
みぞれが降り
うろいついているものが
思い出したように
深呼吸し
片隅で
埃だらけの欠片をねぶっている
鉢植えの丸いサボテンが長い間放置され
黒ずんで黒ずんでいる
それでも緑と棘を留め置く
赤い風船を持つ
しわくちやの手だけが
漂う
電線が垂れ下がっている

◆この世の雪

福田知子

ガラス越しに外を見ていると
ふいに雪が舞い降りてくる
ひとひらだけ ふわっと
いくひらか ぼそぼそと
大きな渦巻きに乗り ざわざわっと
そこにあるのは もの・・・
もの語り・・・
吹き来ては風に押し戻され
あつちのあなた こつちのあなた
ぼくぼく風にあおられ
いく度もいく度も窓ガラスにあたる
張りついでには溶け
溶ける手前で風に連れ去られ
ぼくぼく
ぼくぼく

氷点下を示すこの冬一番の冷え込み
ぼくぼく鳴る風になぶられて
それでもこの世を舞いたい・・・

◆暮籠り詠

岩脇リーベル豊美

角折れ牡鹿と片翼天使大安売りのイヴイヴ
流行語検索して知る師走かな
オルゴール脈拍カウントダウン音色
お伊勢さん行きたしけれど忘れもの
魔力が下がる祈禱してもらって新年
オリーブの花を見たばかり白かったよ
森の宿サヨナラ言ってからボンジュール
急の雪風景白に染まると言い誤り
無理矢理に何か感じようとする雪景色
地吹雪で微笑むほかなし検察の隣人
情熱を注げ心の筋肉凍てないように
近寄れば近寄るほど欲し不埒日和
信じ切り跳び越す跳び箱言葉で言葉
私五人雪女十人のドッペル効果
アーモンド花に雪すれ違うモダニズム

◆ 亡霊の言葉

野口裕

さてそこで考えた
戻ってきた亡霊になんと言葉をかければ良いのかと
とんでもない願いをまず謝るとしても
その次は？
答がなさそうな問いだ

三つの願いをかなえてくれる「猿の手」
ある人が「猿の手」に願ってみた
金をくれと
そこでドアをノックする音 郵便夫だ
息子の勤めている会社から金一封の包みが来た 手紙とともに
「あなたのお息さんは工場の事故で死にました これはお見舞い金で
す」

ハローウィーンには毎年亡霊が家に帰ってくる
トリックオアトリート
子らが無邪気に叫ぶこの言葉
お菓子くれなきゃいたずらするぞ
そう訊かれるこの言葉が
我が霊をいたわれ
さもなくば祟りをなさん
そんな元の意だと最近知った

驚いてその人は思わず「猿の手」に願った
息子を帰してくれと
再びドアをノックする音 葬儀屋だ
息子は棺で戻ってきた
泣き叫んで「猿の手」に最後の願い
これは息子じゃない
息子の抜け殻だ
本当の息子を帰してくれ
三たびドアをノックする音
開ければ誰もいない
息子は亡霊となって戻ってきた

「猿の手」の効き目がなくなれば
願われた対象に願いの続きを向けるのは不可能で
子らのように
対象が声を上げて初めて続く
対話が 言葉が
お菓子をあげても良いし
いたずらされてもかまわない
亡霊よ
何か言ってくれ

ことほど左様に言葉は難しいと
ある学者が好んで用いた説話である

◆ こすれて

大橋愛由等

彷徨^{さまよ}をやめたらアルフォンソが泣きはじめて
(鴉色のカーデイガンを羽織って朝刊を取りにファサードに現
れたそのひとは微笑しながら番のヒヨドリたちをみつめ「あ
なたたちは…」と語り始めるのだがその次の言葉を発するふり
をして空の青をみつめ「今日も始まってしまった」と言葉をつ
なぎ長い髪が朝の不寛容な風にさらされているのを嫌って朝
刊一面の見出し文字を見ることがもなく昨日花たちにアグアを
注がなかったことを思い出し「そうね、あなたたちも」とつぶ
やいて部屋のなかに入ってゆく。そのひとが去ったその庭の
〈あなたたち〉は寄りそうでもなく語り合うでもなく次にその
ひとがファサードから現れるのを待つのもなくそして季節
のうつろいを摩耗しながら感受することもなく道ばたを歩行
する生者とそうでない者―これもまた〈あなたたち〉なのかも
しれない―の越境をこの日この場所の気配として同衾するそ
のありよう。「また同じことが」とその人がてえぶるの上に置か
れた手紙―彷徨をやめた港町から投函された―を今朝も二度
も読みなおして文字たちが語りかけようとしている音を拾い
集めているうちにそれは波の破れた音なのか山奥の梢が擦れ
るときの嘆きなのかわからなくなり「この音たちはヒヨドリの
餌になるのかしら」と昨日と同じことを繰り返していることを
知りながら出窓におかれた迦陵頻伽のフィギアを見つめてい
て。その人のその視線と庭からみつめる〈あなたたち〉の視線
がまぐわい混じり合わないまま昼の躊躇なき風にさらされな
がら気配がすこしずつ亡滅してゆく今日という日。

◆孤島にて

高木敏克

灰色の海の彼方へ消えつつある記憶の中から船はやってくる。老人は窓から外を見る。いったい、もう一つあるはずの灰色の海はどこにあるのか。と、水平線を見たが青以外の何も無い。恐ろしい青の深さだ。「たしかに、わしは過去から目覚める。これは、若い時とは違う今の目覚め方だ」そう思いながら、今度は潮風で曇りはじめた鏡を見る。逆光を背負って影の中の自画像を確かめる。すると船も見える。「明るいは白髪だけだ。だから、この明るさは伸びるに任せるべきだ」背中まで垂れさがる白馬のしっぽは少し黄色が入り、プラチナブロードだから、曲がり角のたびに孤独を選ぶ後ろ髪に花をさせる。海は水平線までもりあがり、そこから風が吹いてくる。そして船は行く。「わしの顔なんて、いやな記憶にする単なる蓋なんだ」と、洗面台の蛍光灯をつけた。真つ黒な顔が現れた。細かいしわが多すぎるのだが、それらはガラスの破片が無数に突き刺さった傷だ。ガラス片は眼球にもキラキラと入り込み。左目はほとんど見えていない。そしたら、斜視がどんと進んで左目だけが灯台を見るようになった。「眼球に残ったガラス片はわしにしか見えない灯台だ。今日だって青い窓の外には白い灯台が見える。いつだって、白い灯台に照らされている」ふと、自分自身の笑顔に気付いて、老人は首を振った。「いったい、誰のための笑顔なんだ」すると、船は消える。

◆天地さかさまの謎(続)

富岡和秀

3
意識が混乱したなかで、しばしののち、あけぼのの明るみが射し始める。あたりを見回すと、少しばかり離れた場所に古い石碑が見える。近づくと、石碑には「Cur deus homo? (クウル・デウス・ホモ)」「なぜ神は人間となりたもうたか」と二行で刻まれている文字が読める。石碑はかなりの年月を経て、薄墨色の箇所や灰色の箇所とがまだら模様になり、いかにも中世に立てられたと思えるような古めかしい碑である。

その石碑の言葉を読んでのち、徐々に明るくなってゆく周囲を見渡してみると、川が流れ、岸边には緑の植物が茂っている。空を見上げると、先程は「天地さかさま」に視えるのは「錯視」ではないと断定的に思ったにもかかわらず、今は天の川に星々の余光がきらめいている。とすれば、私は一時的に、自らの理性による統合を疑うことなく、感性の失認に陥っていたのか。感性や知覚に「失認」の作用があることを見落としていたのだ、と思われた。自らの cogito に優位性を持たせるあまり、感性の失認を導いてしまったのかもしれない。天の川銀河は天にあり、地上の川は水をたたえて流れているではないか。外界の対象を内的対象として認識しているのは間違いない。その認識のなかでごく稀には認識力を失うという「失認」が発現するとすれば、時折、感性は、あるいは誰か知覚は、「失認作用」を導くことがあるのだと思われる。しかし、「失認」は誰にでもあるのではない。ある特殊な精神の持ち主にのみ発生する。あるいはある特殊な精神状態の時だけ「失認」は現れる。「失認」が現れることを本人が知らないことも往々にしてあるだろう。私の異様な体験が私自身に教えていた。その教えのきつかけを作ったのは古びた石碑であるのかもしれない。「クウル・デウス・ホモ」と記された石碑の裏側にはもうひとつの一文が読める。「アミターユス」「量り知れない寿命を持つ者」ならびに「アミターバ」「量り知れない光を持つ者」、全てのものを超える」という古代サンスクリット語の混淆文である。無限は全体を超えるのである。石碑を観察すると表と裏が貼り合わされた

跡がある。貼り合わされるという手の込んだ石碑は、古代東洋と中世西洋の石碑が数百年の磁場を超えて何者かが混合再建した碑であろうか。

4
私は凝然とその石碑を眺め、その前でしばらく黙想にふけた。「失認」から私の意識を回復させたのは、古びた石碑に書かれた言葉であろうか。あるいは私は理性的統合を部分的にまたは一時的に「失調」していたのであろうか。アン・ドレ・ブルトンなら「観念の地下墳墓のなかに消える道をたどったのではないか」とも言うところだ。いずれにせよ、今は「失認」も「失調」もしていない。そう思って、すっかり明るくなった橋の下から、橋の上まで、這い上がり、道端に留めていた二輪馬車に乗る。しばし馬をなだめたのち、馬車を走らせる。ここは原生林のような樹木がひしめく森だが、ところどころに、中世的な家も見える。うっそうたる森を抜けると、やがて大河の岸边にたどり着く。大河には合金とコンクリートでできた巨大な橋がかかっている。時代が一気に変わったような風景である。その大河の橋のそばに止まっている自動車に乗り換える。車は全自動運転の車である。橋の入口に両開き扉があり、閉じた扉は全面が鏡で、橋を通行出来るのはセンサーの通行許可反応のある全自動運転の車だけである。

意識を転移するために、私は運転席のシートを倒す。再び、啓示的で偉大な夢を見たこと念じて深い深い眠りに落ちようと意志する。その眠りの中で賢人たちの夢の中にも越境できるように、また、既に死んだ親しく心優しい地上の星たちの夢境にも渡りたいと願って、眠りに落ちよう。橋の前の全面鏡には車の姿と馬車の姿が写り、その後方には抜け出してきた森の姿が映じる。また、かすかに鏡の向こうの世界が霧のように映じている。深層意識だけが向こう側を感じられるとでもいうように。浅い眠りが深い眠りへと移行するとき、全面鏡の扉は開き、大河を超えて橋を渡れば、私を乗せた全自動運転の車は異世界への旅に出るだろう。そこは摩天楼の森が満ち溢れた激動の世界かもしれないが、真の人生がその大鏡面の彼方の夢界にあることを期待しながら。

◆盲目（あるいは感じる肌理に）

高谷和幸

鉄の「赤」と木の「青」がある曲がり角で、わたしは何を失くしたのだろう。空へ空へ。大きな蔓のような曲がり方で手をのぼし、お互いがきつく感じられる力で、暖かい「先にあのところへ行って待ってようか」鉄の「赤」と木の「青」が入れ替わったところがある。

どれも吐く息のような触れ方ですでに感じられていた曲がり角。その周りに、手をのぼす（わたしからこぼれようとする）。胡桃の殻の中にいる。わたしは鉄の「赤」を指先に感じていた。近づいているのは自転車だった。「それは胡桃」と警告したのは木の「青」だ。

曲がり角は鏡台のように薄れ、それから縮んでいく。思い出すだろうか。おそらく何年か先に、わたしの座した仏の骨が箸の先で音をたてる。その音は物質の音。耳から入り、刻まれる記憶とはまったく違って、初めから物質にあったものだ。盲目の自分を指さすように。

◆赤い花と木

高谷和幸

ゆするもの
「白い風」のように
敷き詰めた石の上を歩いている
あなたは
どこかに隠されている貝の化石の話をして
水の中をのぞくように
探したが見つからない
それから
わたしたちを悲しませる結末まで
まだ長い時間が必要になる
風が吹いていて
赤い花をつけた木が揺れている
それが
何時にあつたのかも分からない
赤い花と木のように

◆海の声

北岡武司

私は髑髏^{どくろ}
洞窟に転がって
海の声を聴く

春の日に
眠くなるよな子守歌
波の声 どこまで広がる

嵐きて
風洞突き抜け
海水の雄叫び

私は髑髏^{どくろ}
洞窟に転がって
海の声を聴く

ヤマトから流れきて
行き倒れ シマの人が
吊ってくれました

私は髑髏^{どくろ}
洞窟に転がって
海の声を聴く



沖永良部島・田皆集落の墓正月

木、北岡両氏に課していたテーマについて語ってもらおう。高木氏は、この島ゆかりの小説家である一色次郎の作品世界について〈海／青のこわさ〉を手がかりに語ってもらおう。北岡

23回目となる「奄美ふゆ旅」である。今回の旅は同行者が三人いた。小説家・高木敏克氏、哲学者・北岡武司氏（ふたりはいずれも「月刊めらんじゅ」誌友）と徳之島から俳人・亘余世夫氏というメンバーである。この三人に共通しているのは、「団塊の世代」であるということ。元氣あふれるこの世代との四日間まさに「団塊ツアー」だった。

同行三人の団塊ツアー 語り合いは深く続いた

氏には前利氏が示した奄美に位相についての感想を聞く。

▼1月16日 去年に続いて、沖永良部島の「墓正月」を見学する。去年は知名町瀬利集落を見学できた。今年は田皆集落。この「墓正月」もさかんで天候もよく多くの人が参加していた（写真）。われわれがお邪魔したのは今井家の墓所。この一族のひとりである今井力夫氏が去年二月知名町長選挙に当選している。

永年の知人である新納忠人氏とも会う。今は退いているが黒糖焼酎の蔵元である「新納酒造」の前社長である。ここで製造されている「天下一」を私は愛飲している。

続いて田皆岬を見学する。高所恐怖症のわたしは断崖絶壁に近づけなかった。上りの船で徳之島に向かう。波止場では仔牛が売られていく姿も。船中で新納氏と再会する。徳之島では俳人・亘余世夫氏が迎えに来てくれる。待っている間にこの島の卓越したウタシヤである中島清彦氏の待望のCDが発売されているのを知り購入。高木、北岡氏にも勧める。

夜は語りの会。吉満義彦や、俳句の話。犬田布集落のことなどを語る。島の歴史とシマンチュの思いが、時を超えて、凝縮されて語られるさまは、まさしくこの島がたどってきた苦悩と熱情の歴史をそのまま反映していた。

▼1月18日 徳之島から奄美大島までは飛行機で移動。名瀬市内に到着後、初めて泊まる宿に向かう。この時期、スポーツ合宿などで名瀬市街地のホテルがすべて満席となっていた。四人まとめて相部屋で過ごす。

夜は、北岡氏とすこしだけウタシヤ・西和美さんの店に顔を出す。続いて飲み会へ。沖永良部島から合流した前利潔氏と、南海日日新聞の久岡学記者、将来の奄美文学を背負って立つ雪田倫代氏もまじえて合計七人。この日も議論が活発に交わされ、最後の夜らしい盛り上がりみせた。

▼1月19日 午前中、詩人の仲川文子さんと歓談。奄美の詩人についてなど意見を交わした。去年逝去した藤井令

詩と評論
月刊「Mélange」Vol.129
神戸

2018年01月28日 通巻129号
発行所/月刊「Mélange」編集部
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F
編集・発行人/大橋愛由等(「Mélange」同人)
maroad66454@gmail.com
定価 600円(税別)